

錢屋遺跡

2019

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

せに や い せき
錢 屋 遺 跡

2019

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、美祢市絵堂地内にある錢屋遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、一般国道490号（絵堂萩道路）道路改良工事に先立ち、山口県宇部土木建築事務所の委託を受けて、公益財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。

発掘調査は、開発事業等に伴い、やむを得ず遺跡が消失する部分について、関係機関が協議を行い、記録保存を図るために実施するものです。

このたびの調査では、中世から近世にかけての溝や建物の柱穴等が確認されるとともに、弥生時代及び中世から近世にかけての土器や陶磁器等が発見されました。

今回の調査地は江戸時代に寛永通宝の鋳造が行われた長州藩銭座跡に隣接しており、発見された柱穴等の遺構や土器、陶磁器は、当時、銭の鋳造に関わった人々が残したものと考えられ、地域の歴史を知る上で貴重な資料といえます。

本書が郷土の歴史や文化財保護への理解を深める資料として、また、教育や文化的振興、学術研究等に広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、御指導と御協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人山口県ひとづくり財団
理事長 原 田 尚

例　言

- 1 本書は平成30年度に実施した^{ついで}錢屋遺跡（美祢市美東町絵堂地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県宇部土木建築事務所からの委託（契約名：一般国道490号（絵堂蔵道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託第44工区）を受けて実施した。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター
調査担当 次長 石井 龍彦
調査第二課主任 森田 孝一
調査員 山田 圭子
- 4 本書の第1図は、山口県宇部土木建築事務所提供的地形図を元に作製した。第2図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「山口」を複製使用した。
- 5 本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北で示した。国土座標の単位はmであり、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S K : 土坑 S D : 溝 S P : 柱穴 N R : 自然河川
- 9 本書の作成・執筆は、石井・森田・山田が共同でを行い、編集は森田が行った。なお、執筆分担は次のとおりである。

I、III-1-(1)、2-(1)・(2)：石井
II、III-1-(2)、2-(3)、3-(1)・(2)・(3)、IV：森田

本文目次

I 調査に至る経緯と調査の概要.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査の概要.....	1
II 遺跡の位置と環境.....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	3
3 長州藩銭座跡および銭屋遺跡について.....	5
III 調査の成果.....	7
1 A地区 (1) 調査区の概要	7
(2) 遺物	9
2 B地区 (1) 調査区の概要	10
(2) 遺構	10
(3) 遺物	15
3 C地区 (1) 調査区の概要	16
(2) 遺構	16
(3) 遺物	20
IV 総括.....	23

挿図目次

第1図 調査区設定図.....	2	第10図 N R 1 実測図.....	14
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	4	第11図 B地区出土遺物実測図.....	15
第3図 A地区調査区.....	7	第12図 C地区遺構配置図.....	17
第4図 A地区壁面土層図.....	8	第13図 S K 12 実測図	18
第5図 A地区出土遺物実測図.....	9	第14図 S K 17 実測図	18
第6図 B地区遺構配置図.....	11	第15図 S K 18 実測図	19
第7図 B地区壁面土層図.....	12	第16図 S P 8 実測図	19
第8図 S K 3 平面・断面実測図.....	13	第17図 C地区出土遺物実測図.....	20
第9図 S D 1 平面・断面実測図.....	13		

写真目次

写真1 重機による表土除去.....	1	写真3 遺構掘り込み作業.....	1
写真2 遺構検出作業.....	1		

表目次

第1表 A地区出土遺物観察表.....	9	第3表 C地区出土遺物観察表.....	21
第2表 B地区出土遺物観察表.....	15		

図版目次

図版1	調査区遠景（北から） 調査区近景（東から）	N R 1 完掘状況（東から） N R 1 完掘状況（南から）
図版2	調査区近景（西から） 調査区全景（真上から）	C地区全景（真上から） C地区近景（南から）
図版3	A地区全景（真上から） A地区完掘状況（西から）	東壁土層断面（西から） 北壁中央部土層断面（南から）
図版4	A地区完掘状況（南から） トレンチ1北壁土層断面（東から）	南壁土層断面・S K 1（北から） C地区中央部完掘状況（南から）
図版5	トレンチ1北壁土層断面（西から） トレンチ1北壁西端土層断面（南から） トレンチ1北壁東端土層断面（南から） トレンチ1中央部土層断面（南から） トレンチ1中央部地山落込み（南から）	西側完掘状況（南東から） 西側完掘状況（北西から） 中央部完掘状況（北東から） 中央部完掘状況（西から）
図版6	トレンチ2（北西から） トレンチ2北側土層断面（西から） トレンチ2南側土層断面（南西から） トレンチ3北側土層断面（西から） トレンチ3南側土層断面（南西から）	S K 12 検出状況（南から） S K 12 完掘状況（北西から）
図版7	B地区全景（真上から） B地区西側完掘状況（西から）	S K 12 挖り込み状況（北西から） S K 12 木炭出土状況（南西から）
図版8	B地区中央部完掘状況（北東から） B地区完掘状況（東から）	S K 12 土層断面（南西から） S K 12 西側肩部被熱状況（南西から） S K 15・16 完掘状況（北東から） S K 15・16 土層断面（北東から）
図版9	西壁土層断面（北東から） S D 2 検出状況（北から） S D 2 検出状況（南東から） S D 2 完掘状況（北西から） 西壁南側土層断面（北東から） 北壁中央部土層断面（南から） 西側完掘状況（北東から） 西側完掘状況（北から）	S K 19 完掘状況（東から） S K 17 土層断面（西から） S K 8 土層断面（北西から） S K 10 土層断面（北東から） S K 7 土層断面（北西から） S K 9 土層断面（東から） S K 9 完掘状況（南西から） S K 18 遺物出土状況（南東から） S K 18 検出状況（南から） S K 18 遺物出土状況（北東から） S K 18 遺物出土状況（北西から） S K 14 検出状況（南から）
図版10	西側検出状況（南から） 東側完掘状況（北西から） S K 3 検出状況（南から） S K 3 土層断面（北から） S D 1 土器出土状況（北東から） S D 1 土器出土状況（南東から） S K 2 完掘状況（北西から） S K 1 完掘状況（北から）	S P 9 根石検出状況（北東から） S P 10・11 土層断面（南から） S P 8 遺物出土状況（西から） トレンチ1完掘状況（南西から） トレンチ2完掘状況（南西から）
図版11	N R 1 土層断面（東から） N R 1 土層断面（北東から） N R 1 完掘状況（北から）	A地区・B地区出土遺物、 C地区出土遺物①
		図版20 C地区出土遺物②

I 調査に至る経緯と調査の概要

1 調査に至る経緯

美祢市美東町絵堂銭屋地区には長州藩銭座跡や銭屋遺跡等、主に中世から近世にかけての銅の精練や銭貨の鋳造に係る遺跡が知られている。特に長州藩銭座跡は、これまでに2回の重要遺跡確認緊急調査が行われ、当時の絵図と現地遺構の対比が可能な全国的にも例のない銭座遺跡であることが判明している。そのため、県教育委員会は国土土木建築部局に対し、地域高規格道路小郡萩道路の路線決定にあたり、極力長州藩銭座跡推定範囲を回避するよう要望してきた。

その後決定した路線は長州藩銭座跡に隣接する銭屋遺跡を通過することになり、宇部土木建築事務所より依頼を受けた県教委は平成28年12月19日と平成29年2月28日、3月1日に試掘調査を実施した。調査の結果、土坑や柱穴等の遺構やからみが検出された。これを受けて、県教委は埋蔵文化財の保護措置を要する範囲を宇部土木建築事務所に示した。その後、橋脚の設置場所が決定し、3か所(A・B・C地区)について発掘調査を実施することになった。

関係者による協議の結果、発掘調査は平成30年度後半に公益財団山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することになり、宇部土木建築事務所より、4月3日付けで、「一般国道490号(絵堂萩道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託第44工区」として委託を受けた。

2 調査の概要

事前準備を経て、10月23日には地元の集会所で作業員説明会を行った。11月5日より重機による表土除去を開始し、A地区、C地区、B地区的順に行った。8日には器材を搬入、人力による作業は13日より開始し、A地区、B地区、C地区の順に壁面清掃及び遺構検出を行った。その後は、A地区トレンチの掘り込み、B地区、C地区的順に遺構の掘り込みを行った。12月5日には測量業者に委託して、国土土標杭の設置を行った。各地区の掘り込み終了後に清掃作業を行い、25日には実機ヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

その後、調査員による主要遺構の実測図作成、各地区的平面図作成を行い、1月10日には器材を撤収した。11日には実測図作成を完了、15日より重機による調査区の埋め戻しを開始し、21日に終了した。その後、調査区が農道部分のB地区については、車両等の通行に耐えるよう表層部の土壤改良や砂利敷、転圧を行った。その後、埋蔵文化財センターで、持ち帰った出土品や図面、写真的整理を行い、遺物の写真撮影や原稿執筆を進め、本報告書を刊行した。



写真1 重機による表土除去

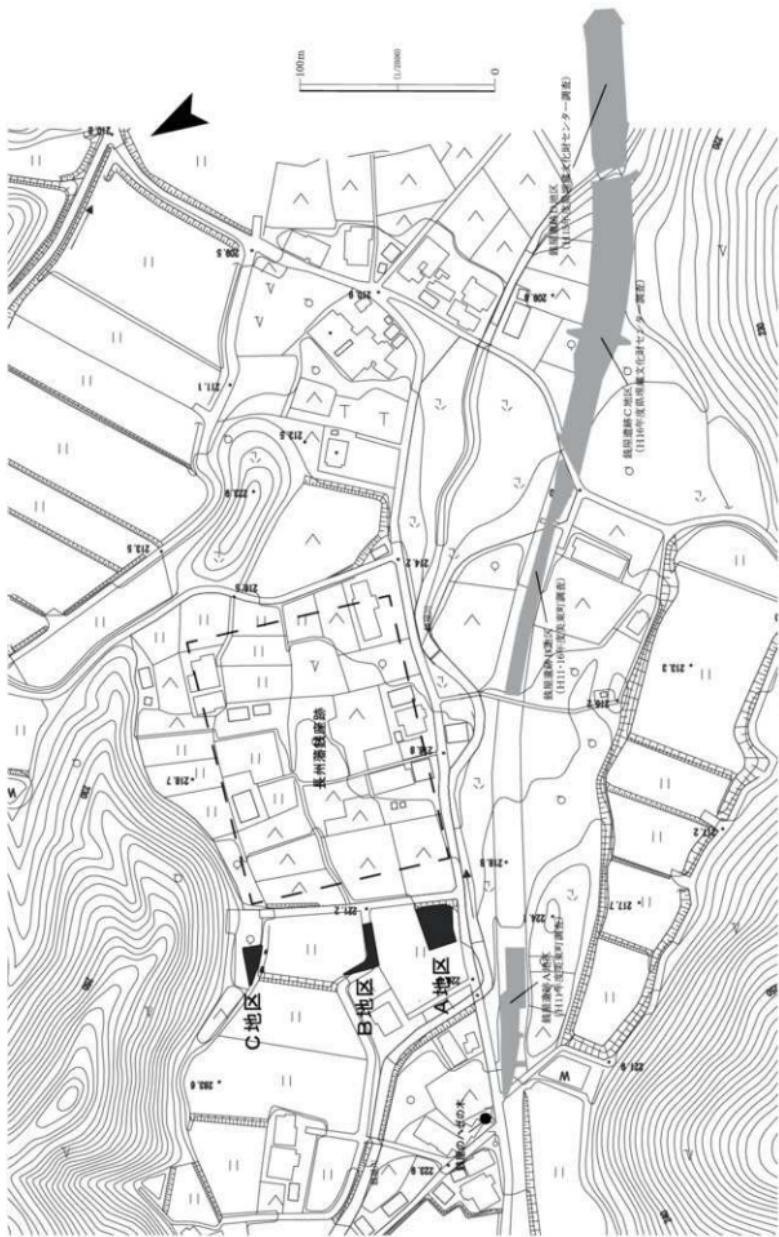


写真2 遺構検出作業



写真3 遺構掘り込み作業

第1図 調査区設定図



II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

銭屋遺跡は、山口県美祢市美東町絵堂銭屋地内に所在する。まず、遺跡のある美祢市は県の西寄り中央部、四方が山に囲まれた内陸部に位置し、東は山口市、北は萩市、長門市、南は宇部市、山陽小野田市、西は下関市に接する中山間地域である。地理的には中国山地の西端部で、市域の中央部には日本最大のカルスト台地「秋吉台」が広がっている。河川は南の瀬戸内海に向かって流れる厚東川や厚狭川およびその支流河川が多数あり、平地の多くはこれらの諸河川沿いに小盆地を形成している。

銭屋遺跡のある銭屋地区は、美祢市の北東部、萩市との境に聳える標高615.9mの鯨ヶ岳の東南裾部に位置し、東は城前山から北方向に派生した丘陵、南は石津山があり、それらの山々に囲まれた狭隘な小盆地を形成する。その盆地床は概ね東西約0.8km、南北0.3kmで、標高は約210mを測り、鯨ヶ岳裾部から派生した厚東川水系の大田川の支流、銭屋川が集落を北西から東南方向に貫流する。気候的には内陸山間部のために寒暖の差が大きく、とくに冬は厳しく県内有数の積雪地として知られ、江戸時代幕末に編纂された地誌『防長風土注進案』にも雪が多い地と記されている。

2 歴史的環境

銭屋地区のある美祢市美東町の北部地域には、各時代の遺跡が多く分布している。この地域での最も古い時代の遺跡としては秋吉台上に立地する馬コロビ遺跡がある。スクレーパーが表探されており、旧石器時代から人の活動があったことを傍証する。縄文時代の遺跡では大田川に近い平原第Ⅱ遺跡で尖頭器や石鎌等が出土し、秋吉台上でも池ノ原遺跡や馬コロビ遺跡で石鎌や縄文土器、三角原遺跡では硬玉製块状耳飾りが採集されている。また銭屋地区内でも長州藩銭座跡地内から敲石・磨石、また銭屋集会所付近で打製石斧が見つかっている。続く弥生時代の遺跡としては植畠遺跡、中原遺跡、碇遺跡などが挙げられるが、いずれも遺物散布地で遺構の存在は明らかになっていない。古墳時代になると、松原遺跡や中原遺跡など遺跡数が増え、中でも植畠遺跡では中期の祭祀跡が検出されている。また大田の平原遺跡では発掘調査が行われており、多数の堅穴住居や掘立柱建物が検出され、後期の集落跡であることが確認されている。

古代においては、銭屋地内から南側方向約5kmに日本最古の国営銅山、国指定史跡の長登銅山跡がある。奈良東大寺大仏鋳造の料銅を産出したことでも著名で、これまでの調査で製錬関係の遺構や木簡や土器類などの遺物が数多く検出されている。また、銭屋から約1.5kmの西には県指定史跡の末原窯跡群がある。美祢郡唯一の須恵器窯跡で現在、登窯5基が保存されている。

中世の遺跡は多数あるが、とくに植畠遺跡では多数の掘立柱建物、井戸、溝、墓などが検出され、鎌倉期と室町期の村落の様相を知ることができる遺跡である。末原遺跡では室町時代の掘立柱建物1棟が確認されており、呪符木簡も出土している。また経塚関係では、室町時代前期の和鏡が出土した鎧市経塚や方形基壇の遺構が検出された塔ノ塚がある。なお、中世城郭としては山城が点在し、銭屋遺跡の近傍では、北東方向に小野城（城山、古城山）があり、櫓跡が残る。一方、北西方向の杉ヶ坪側には櫓跡、馬場跡、古墓があるといわれる赤城跡（心月山、志月山）もある。また、中世から近世にかけては鉱山遺跡も多数存在する。銭屋地内の南約800mにある赤小野銀銅山跡をはじめ、松原銅山跡、



- 1 錢屋遺跡 2 長州蘆銭座跡 3 紗山遺跡 4 末原廻跡群 5 末原遺跡 6 赤城跡（心月山） 7 諏市経塚 8 小野城跡
 9 佐山台遺跡 10 横島遺跡 11 赤小野銀銅山跡 12 北河内経塚 13 中原遺跡 14 塔ノ塚遺跡 15 松原遺跡 16 松原銅山跡
 17 篠遺跡 18 小川蛇山跡 19 橫野山銅山跡 20 長登銅山浜ノ宮山跡 21 長登銅山北平山跡 22 長登銅山づらヶ葉山跡 23
 長登銅山尻無山跡 24 池ノ原遺跡 25 北馬コロビ遺跡 26 長者ヶ森遺跡 27 馬コロビ遺跡 28 三角原遺跡 29 長登銅山跡
 30 古山製鍊所跡 31 長登銅山東吹星跡 32 山神製鍊遺跡 33 古賀音鉈山跡 34 犬ヶ谷城跡 35 一ノ瀧銅山跡 36 友水遺跡
 37 平原第Ⅱ遺跡 38 平原遺跡

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

横野山鉱山跡などのほか、とくに長登周辺には多くの鉱山跡が点在している。中でも日本最古の国営銅山として最も著名な長登銅山跡は、銭屋地内から南へ約5kmの所に位置する。

なお、銭屋は中世以前の様相はほとんど明らかではないが、中世には村名を桑原村と称していたとする（青景文書）。近世になると、銭屋地内には「銭屋」の地名の由来になった「長州藩銭座」が17世紀に設営される。銭屋の歴史上で大きな事項であり、今回の調査にも関わることであるため、以下、特筆しておく。

3 長州藩銭座跡および銭屋遺跡について

江戸時代の初め、江戸幕府は、寛永13（1636）年に貨幣制度の確立と普及を目的として、10世紀後半に皇朝十二銭の鋳錢を停止して以来、約650年ぶりに公に銅錢「寛永通宝」の鋳造を実施する。まず、江戸芝・浅草と近江坂本、京都建仁寺、大阪で鋳造を開始したが、翌年の寛永14（1637）年には増産のため、新たに水戸・仙台・吉田（三河）・松本・高田（越後）・長門・備前・豊後の全国8カ所でも銭座設置を命じた。長門では萩藩が当地の赤村を選んで銭座を設け、その年の8月頃に鋳錢を開始したようである。但し、3年後の寛永17（1640）年11月には、幕府は新銭過剰を理由に鋳造停止の命令を出し（毛利氏四代実録）、操業期間わずか約3年4か月で終わる。以後の公式な記録はないが、当地ではその後も25年間にわたり、私鋳が続けられたものの、結局は露見して幕府の知るところとなり、寛文5（1665）年に藩は責任を村民に転嫁し、藩命により当村をことごとく焼き払ったと伝えられている。なお、その時に焼け残ったと伝承される権の古木「銭屋のハゼの木」が現集落の一角に現存しており、現在、市文化財に指定されている。

なお、銭屋で貨幣を鋳造していた当時の村について詳細な記録はないが、銭屋地内の各所にある鉱滓の分布状況や「女郎屋敷」「勘場」「茶屋」などの地名から、また『防長風土注進案』にはかつて「銭屋千軒」と称されており、往年の盛況ぶりの一端がうかがえる。この地に銭座を設営した背景には秋吉石灰岩地帯縁辺部に埋蔵されている銅資源があり、上述したとおり、周辺には銅山が多く、とくに近郊の赤小野銀銅山が関わっていたと思われる。併せて、中世後半には大内氏の影響下において長登銅山をはじめ、諸銅山で銅生産を行ったと考えられている。また、それに伴う冶金に関わる職人集団も在地したことが推測でき、こうしたことが当地に銭座が設置された大きな要因と考える。なお、寛永通宝鋳錢以前に輸入銭「永楽通宝」を種錢として永楽通宝私銭を鋳造していたとする説もある。

次に、これまでの「長州藩銭座跡」の調査に関する記述と、古くは大正時代から諸氏によって銭座の場所が探索され、銭屋地内で坩堝等の遺物が採集されたことにより、銭座が銭屋地内にあることが推定されていた。但し、明確な地点やその範囲は長い間、特定できなかった。その後、昭和60（1985）年に山口県教育委員会が銭座の位置等を調べるため、学術的調査（重要遺跡確認緊急調査）を計画した。それに先立って実施した文献史料収集調査では、山口県文書館において長州藩銭座の設計図にあたる絵図を発見した。翌年、絵図を参考に銭屋川北側の地点について部分的なトレチ発掘調査を実施した結果、発掘調査面積は約300mに過ぎなかつたが、絵図に示された通りの敷地を取り囲む柵跡、建物の一部である可能性のある柱穴を検出し、銭座の位置を特定した。また、寛永通宝、坩堝、砥石、陶磁器などの遺物が出土した。なお、発掘調査面積は銭座の敷地面積全体の2%に過ぎず、内部施設や銭座の周辺に散在する製鍊跡や諸施設などの把握がその後の課題となつた。

平成17・18年度には、その成果および周辺での開発事業の状況を鑑みて、山口県教育委員会が銭座跡内で文化庁の国庫補助事業による第2次的重要遺跡確認緊急調査を実施している。その調査では銭座跡内の各所にトレチを設定し、合計350m²を発掘した。結果、鉄工房面の広がりや建物の基礎、境界区画と考える石列、炉、井戸などを検出、埴堀や砥石、寛永通宝などの銭関係の遺物も出土している。また、この調査では昭和60年の調査で推定した銭座の位置範囲がやや北側にずれる可能性が高いことを明らかにした。

一方、銭座跡周辺に広がる「銭屋遺跡」に関して、平成11年度および平成15・16年度に長州藩銭座跡の南側、銭屋川を越えたところの東西に通る県道萩秋芳線単独道路の改良工事に伴い、美東町遺跡調査会並びに山口県埋蔵文化財センターが路線内の発掘調査を実施した。平成11年度は美東町遺跡調査会が銭屋遺跡の西北側で面積601m²の調査を実施し、近世の掘立柱建物、欄、石垣、土坑、柱穴などを検出した。また同調査会は平成11年度と平成16年度に銭屋川を挟んで銭座跡と対峙する地点から東側にかけての地点も調査した。調査面積約814m²で、掘立柱建物や土坑、溝、井戸などを検出、とくに金属製錬を示す多数の炉跡があり、埴堀・羽口、鉛等などが出土した。また、平成15・16年度の山口県埋蔵文化財センターによる調査は銭屋遺跡の東南部で、2か年度合計約4,600m²を発掘調査し、大型炉跡、からみ山、土坑、石組遺構などの遺構を検出し、こしき炉片や埴堀、羽口などの製錬関係遺物等が出土し、製錬工房跡および製錬場の広がりを確認した。これらの一連の調査では、銭座の周辺で中世末から近世初期にかけて貨幣の材料になる銅や鉛の製錬が行われていたことがわかつてきた。

おわりに、今回の発掘調査地と銭座の位置関係は、山口県教育委員会が平成17・18年度の発掘調査において確認した銭座の西側外郭欄ラインにはほぼ平行して西側を通る農道を挟んだ場所にあり、とくにB地区東端と銭座西側外郭ラインとは、最も近い所で約25mの距離にある。

引用・参考文献

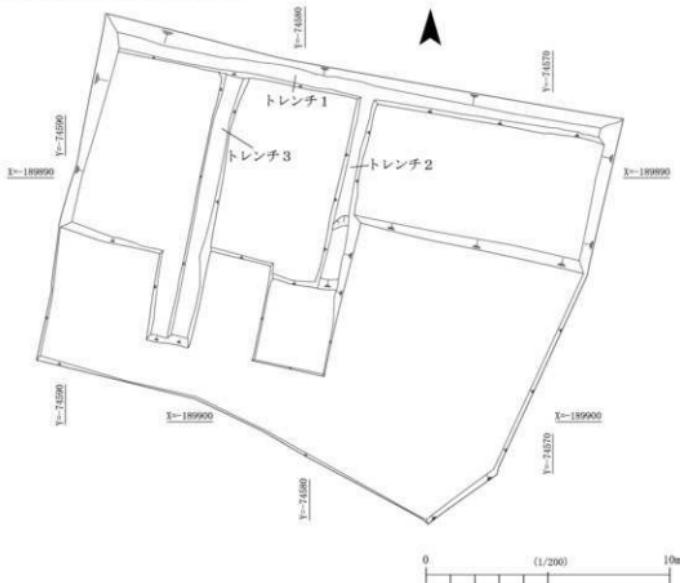
- 財團法人山口県教育財團 山口県埋蔵文化財センター 2004『銭屋遺跡Ⅰ』
財團法人山口県ひとづくり財團 山口県埋蔵文化財センター 2005『銭屋遺跡Ⅱ』
山口県教育委員会 1987『銭屋—長州藩銭座跡—』
山口県教育委員会 2007『長州藩銭座跡—平成17・18年度重要遺跡確認緊急調査報告書—』
山口県文書館 1962『防長風土注進案 第17巻 美禰宰判』
美東町遺跡調査会 2005『銭屋遺跡』
美東町史編さん委員会 2004『美東町史 通史編・資料編』
森田孝一 1997『美東町銭屋表採の石器について』『温故知新』第24号 ほか

III 調査の成果

1 A地区

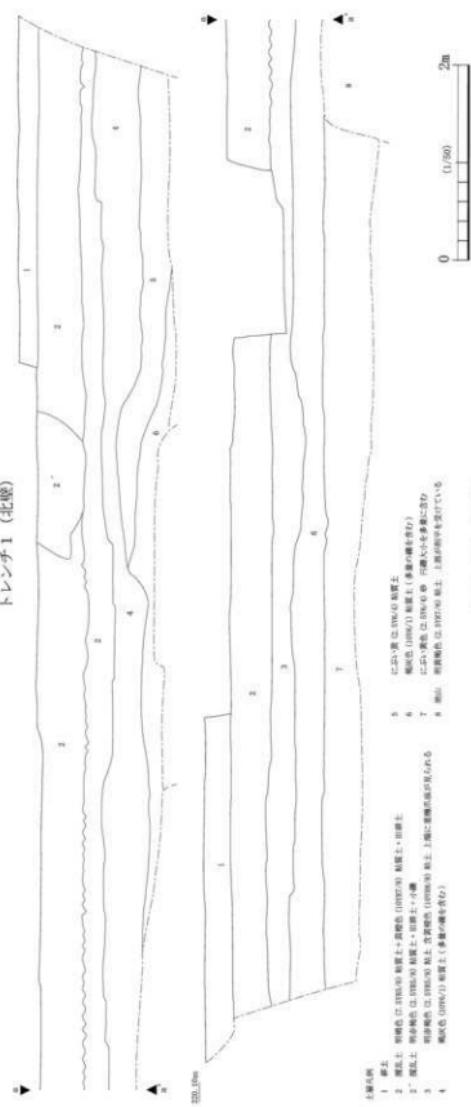
(1) 調査区の概要

A地区の南側は市道を挟んで銭屋川に接している。調査区の南半部は川の氾濫原であったと考えられ、地山は深く落ち込み、厚い客土を大量に搬入して埋め立て耕地としている。平成28年にA地区のすぐ北側で県教育委員会が行った試掘調査では、耕土下5cmで地表面に多数の遺構が検出された。しかし、A地区では、同じ地山は北部中央付近のみで検出されている。地表面は試掘坑より約1m低位で検出されており、上面はかなりの削平をうけたと考えられる。このためか、地表面に遺構は検出されなかった。調査区北壁に接するトレンチの土層断面には、石灰岩由来するとみられる明赤褐色粘土の客土層上面に重機の爪やキャタピラの痕が認められ、大規模な埋め立てや整地が行われたことがわかる。北端部では、中央付近で地山が途切れ、西側は河川氾濫原に伴うとみられる厚い砂礫層が堆積しており、東側は地山が約4m緩やかに下った後に、深く落ち込んでいる。このトレンチの中央付近から南へ設定したトレンチでは、北端部付近は地山が検出され、1mあまり南で南方に向かって深く落ち込んでいる。東壁の土層断面では、上部を除き、南に斜めに下る土層が連続しており、北側から順次大規模な埋め立てが行われている。これらの客土中には大型のコンクリート片も含まれており、現代の埋め立てであることがわかる。以上のことから、調査区の北部中央付近の一部のみが、北側から張り出した丘陵の先端部にあたると考えられる。

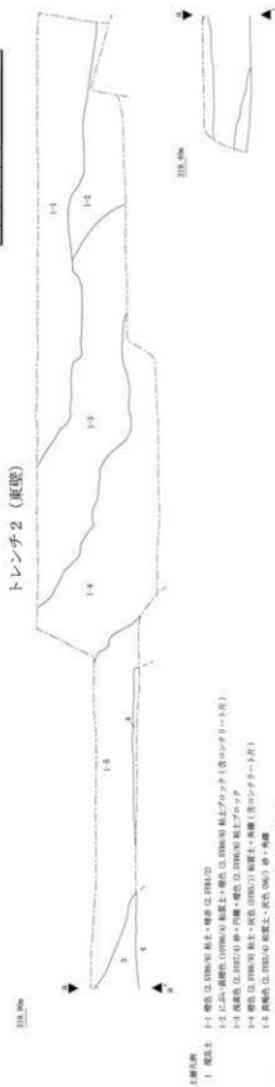


第3図 A地区調査区

トレンチ1（北壁）



トレンチ2（東壁）



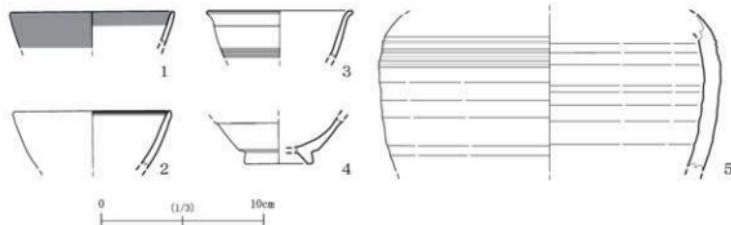
第4図 A地区断面土層図

(2) 遺物 (第5図 図版19)

遺物は陶磁器9点、瓦質土器1点の合計10点、全て破片で、ほとんど小片である。また多くはトレチ内から出土した。以下、主なものについて記述する。

1～4は陶器の梶である。1は体部から比較的直線的に外上方に立ち上る口縁部で、端部は丸くおさまる。2は体部から口縁部にかけてのもので、緩やかに内湾しながら立ち上がっている。器壁が比較的厚い。3も体部から口縁にかけてのもので、口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさまる。4は底部で、角張りの腰部から内湾して外上方に開いて立ち上がる。高台は鋭く削り込まれており、疊付は面取りを施す。体部外面のヘラ削りも丁寧で、施釉は外面体部下半の腰部まで厚くかけられている。施釉部分には細かい白い斑点が広くみられる。なお、1～4はいずれも藁灰釉で、長門の深川窯のものとみられる。時期は3が19世紀以降、その他は18世紀後半から19世紀初め頃のものである。5は備前焼の小型壺の胴部である。丸みを呈する肩部で、明瞭な5条の櫛指が巡らされている。16世紀代。

なお、図化した以外に、トレチ2から出土した15～16世紀の佐野焼とみられる壺の体部片がある(図版19)。外面の焼成がやや甘いが黒灰色を呈する瓦質のもので、調整は体部内面が同心円文當て具痕後、細かいハケ目、外面はヘラナデで一部指頭圧痕による浅い凹みが認められる。また、トレチ1中央部の黄色粘質土(地山)上面およびトレチ1中央部の下位にある砂礫層内から、萩焼の小片が出土している。



第5図 A地区出土遺物実測図

第1表 A地区出土遺物観察表

No.	標 印	圖 版	出土場所	器種	器形	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内 外)	主な構造 (内 外)	備考
						口徑 (復元値)	底面 (残存値)	底径 (復元値)					
1	5	19	トレチ1 中央部 砂礫層	陶器	梶	(100)	(24)	-	緻密	良	灰白色 (口縁) ナリープ(黄) ナラブ(青)		萩焼
2	5	19	トレチ1 東端 灰白色粘質土 (瓦色粘質土) 上層	陶器	梶	(96)	(35)	-	緻密	良	灰白色 灰白色 (口縁部) オリーブ(黄)		萩焼
3	5	19	トレチ1 東端 黄色粘質土上層	陶器	梶	(87)	(39)	-	緻密	良	灰白色 灰白色		萩焼
4	5	19	トレチ1 東端 黄色粘質土上層	陶器	梶	-	(26)	(41)	緻密	良	灰白色 にぶい黄褐色	回転ヘタケツリ	萩焼
5	5	19	青色粘土直上層	陶器	小壺	腹径 (21.0)	(96)	-	密	良	灰青褐色 暗褐色～褐色	回転ナデ 回転ナデ	備前焼
6		19	トレチ2 低含層	陶器	壺	-	-	-	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 青灰色	ハケ目 ハケ目の後ナデ	佐野焼

2 B地区

(1) 調査区の概要

B地区は、農道部分が調査対象で、平面形状はL字状をなす。調査区の東西方向東端部は、砂礫が堆積し、この面に土坑や柱穴が掘り込まれている。中央部から屈折部にかけては、黄橙色粘土からなる地山が広がり、溝や土坑、多数の柱穴が検出された。遺構から出土した遺物は極めて少なく、S D 1から出土した弥生土器のほか、江戸時代の陶器や埴堀片等である。屈折部より北側は砂礫が堆積しており、マンガン等の金属成分が集中する帶状の黒色砂礫（S D 2）が確認された。

屈折部より東側北壁の堆積状況をみると、西側は遺構面上にあまり礫を含まない粘質土、中央から東側では拳大～人頭大の多量の礫を含む土が堆積し、この上面を削平・整地して耕地を造成したことわかる。屈折部より北側西壁の堆積状況は、南側は遺構面上に粘質土、北側は礫を多量に含む砂質土が堆積し、この上面を削平して整地し、耕地化している。その後、農道を敷設する際には、南側から順に盛土を行って路盤を形成している。

(2) 遺構

調査区の南西域に黄橙色粘土の地山が広がり、この部分に最も多くの遺構が集中している。

土坑

7基の土坑が検出されたが、SK 3を除き、平面形は不整形で、比較的浅く、内部に段差やピットをもち、用途は不明である。

SK 1（第6図、図版10）

調査区屈折部の西端付近にあり、平面形は1辺約100cmの隅丸方形を呈する。内外に多数の柱穴や杭穴があり、特に西辺は連続する大小の柱穴に切られている。深さは21～27cm、埋土は褐灰色粘質土で、からみの付着した埴堀片が出土した。

SK 2（第6図、図版10）

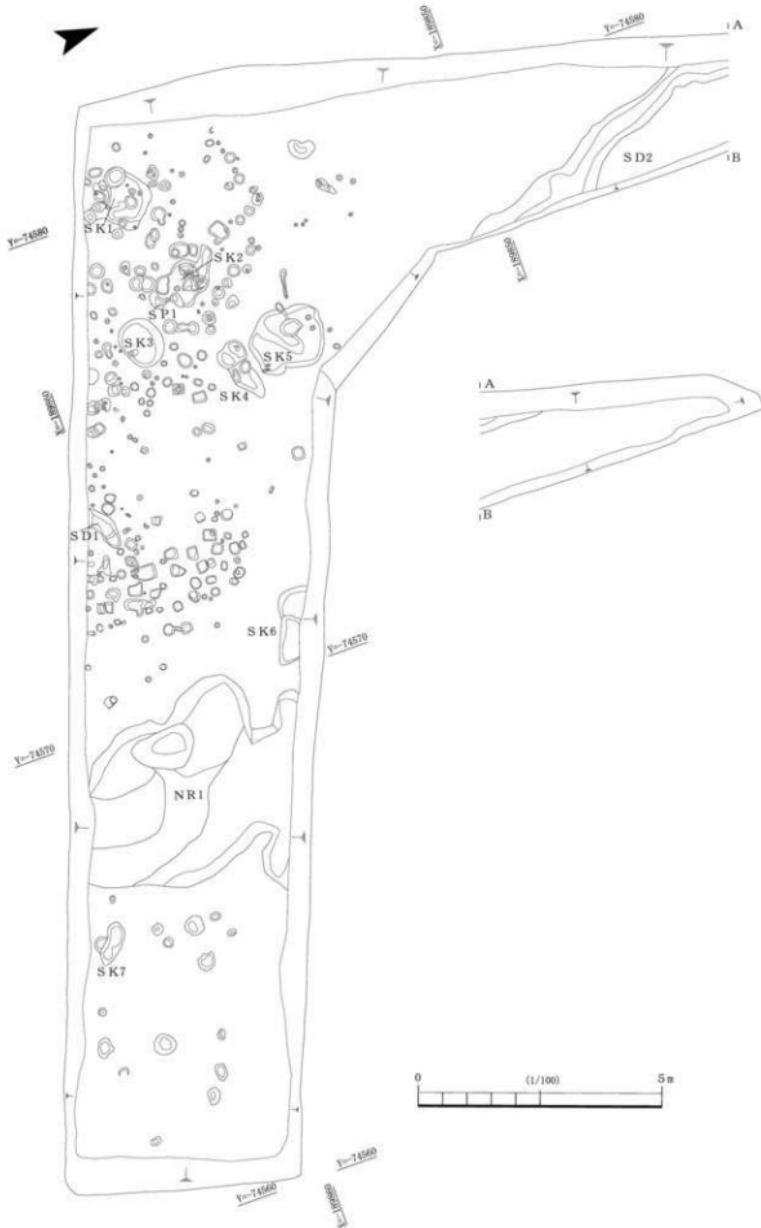
屈折部中央のやや南寄りにあり、平面形は一辺約80cmの隅丸方形で、東西辺にそれぞれ長さ40cm、30cmの突出部を附加した形状を呈す。内部は複雑な段差を有し、多数の柱穴や杭穴が重なり合い、南辺内のSP 1は、深さは5～7cm程度と浅く、埋土はにぶい橙色粘質土である。

SK 3（第8図、図版10）

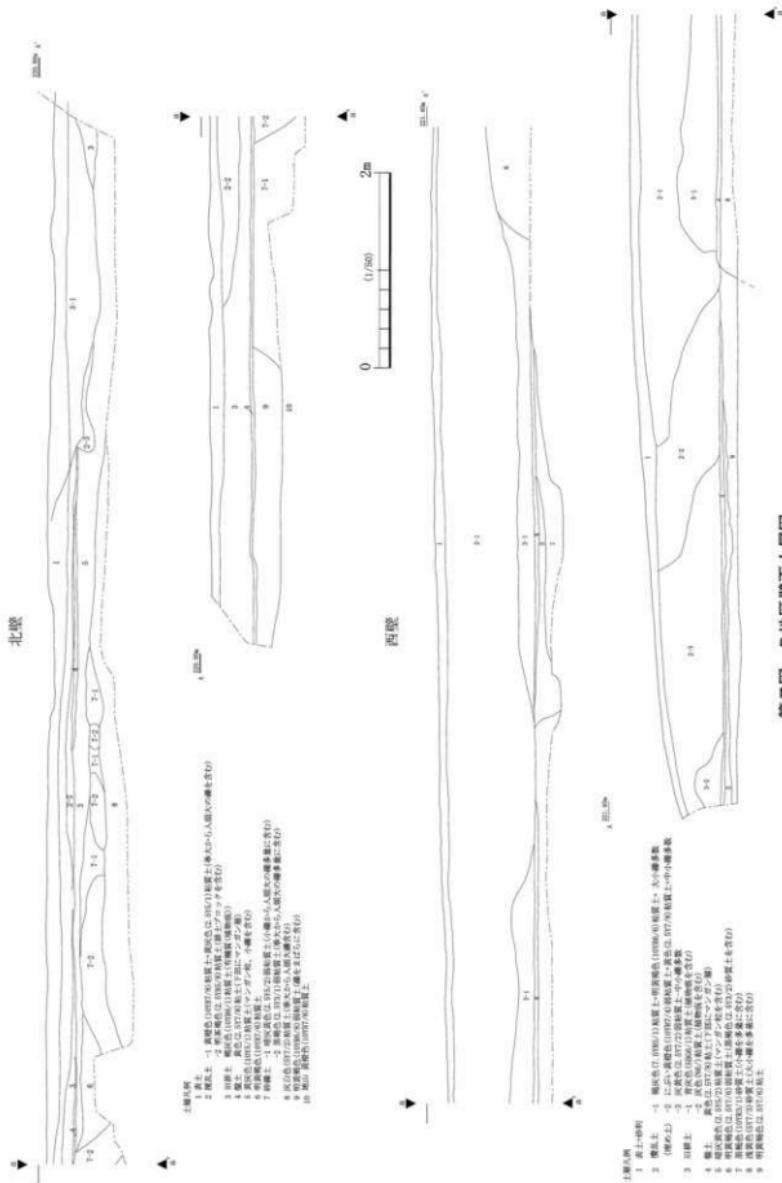
屈折部にあり、SK 2の南東に隣接する。平面形は長円形を呈し、長径100cm、短径82cm、深さは22cmで、南西端には直径10cm、深さ18cmの小ピットがある。埋土はにぶい橙色粘質土に灰褐色粘質土と黄橙色粘質土が混じり、上面より3cmの深さで、須佐唐津焼の擂鉢片が出土した。

SK 5（第6図）

屈折部の北側にあり、平面形は不整隅丸長方形を呈し、長径は最大156cm、短径は130cm、深さは4～16cmを測る。内部は中央やや北寄りにある30cm×46cm、深さ17cmの柱穴をはじめ、杭穴状の小ピットが5個みられる。床面には南西隅から北東にかけて溝状の落ち込みがあり、深さは7～11cmである。埋土は褐灰色の粘質土で、遺物の出土はなかった。



第6図 B地区遺構配置図



第7図 B地区壁面土層図

溝

S D 1 (第9図、図版10)

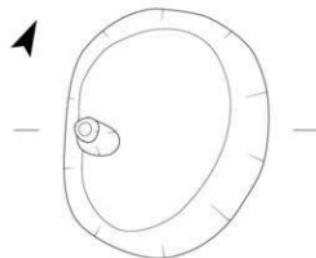
屈折部の東側中央付近の南端にあり、南側は調査区外に続く。調査区内では、幅30~40cm、長さ約100cm、東端部は、二段掘りで、上段は深さ8~9cm、下段の最深部は約20cmを測る。埋土は灰褐色粘質土で、上段部の床面上約1cmから弥生土器の甕の底部が内面を上にした状態で出土した。

S D 2 (第6図、図版9)

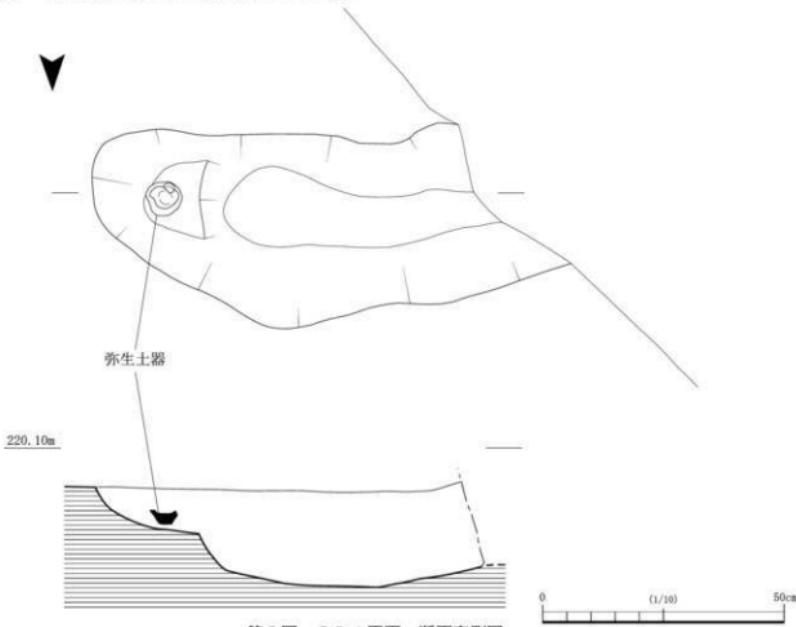
屈折部の北側中央付近を北西から南東に横切る。砂礫土中にあり、埋土は砾を多量に含む黒褐色砂質土で、マンガンとみられる黒い粒が集中している。自然に形成された可能性が高いと考えられ、屈折部東側にあるS K 6も一連の遺構と考えられる。

柱穴

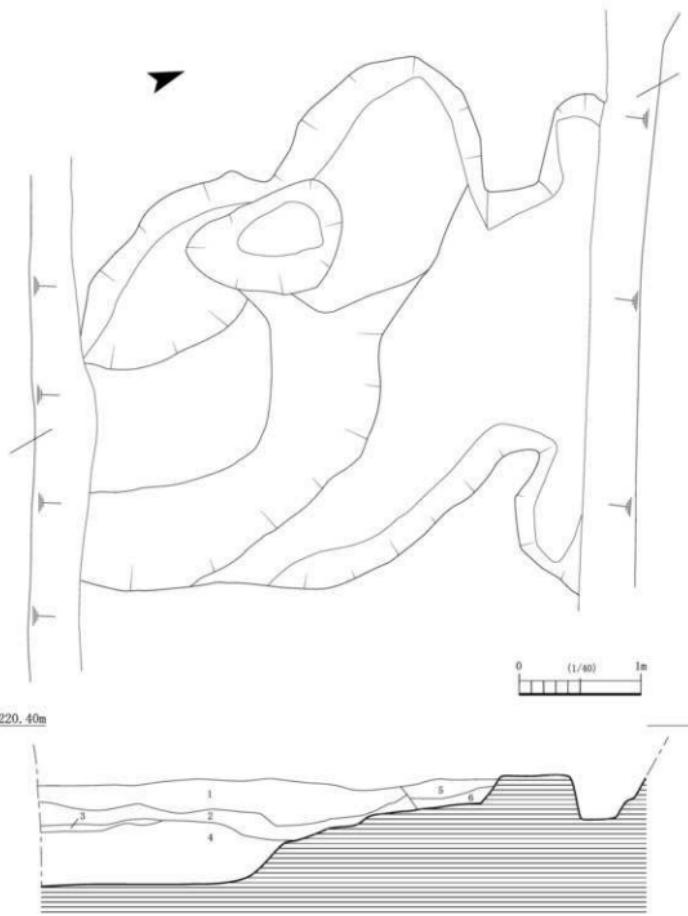
直径10~40cmの約250個の柱穴が検出された。平面形は円形と方形の2種があり、径10~20cm程度のものが多い。調査区内では建物を復元できなかった。



第8図 SK 3平面・断面実測図



第9図 S D 1 平面・断面実測図



- 上層凡例
- 1 にぶく黄褐色(1.0786/2)砂粗粒土(砂大から人頭大的礫を多量に含む)
 - 2 明黄褐色(2. 516/6)砂質土(粗粒大的礫を多量に含む)
 - 3 灰黄褐色(3.032/6)砂質土(部分的に赤黒色(2. 511L, 7/1)の沈着物(ヤンガル)を含む)
 - 4 淡黄色(2. 517/3)砂質土(小礫を多量に含む)
 - 5 灰褐色(7. 518/4)砂粗粒土(砂大以上の礫を多量に含む)
 - 6 灰黄色(7. 517/2)砂質土(砂大から人頭大的礫を多量に含む)

第10図 NR 1 実測図

S P 1

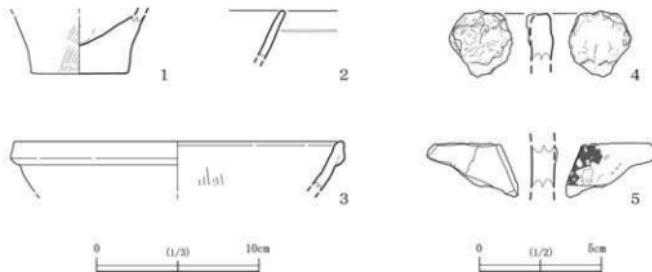
SK 2内の南端部にあり、南北34cm、東西約20cm、深さは約16cm。埋土中から埴堀片が出土した。
NR 1 (第10図、図版11)

屈折部東側の中央よりやや東に位置する。平面形は不整形で、床面は複雑な段差をもつ。東側の落ち込みは、礫の少ない灰白色砂であるが、西側は砂礫と一体化し、範圍も不明瞭である。埋土は大小の多量の礫を含み、遺物は皆無である。

(3) 遺物 (第11図 図版19)

遺物は弥生土器1点、土器1点、陶磁器3点、埴輪2点の合計7点で、いずれも破片である。内、遺構に伴うものは土坑2、溝1、柱穴1の5点で、200を超える遺構の数に比して、遺物の出土割合が非常に低い。以下、主なものを紹介する。

1は弥生土器で、壺の底部である。全体に摩滅しているが、底部は平らで黒斑を有し、外面の器表にはナデ調整が認められる。胎土には石英や長石等の砂粒や細かい小石が多く含まれる。時期は弥生時代中期と推定する。2は陶器の碗の口縁部で、器面には薄い釉薬を施す。口縁にひずみを有する。江戸時代前半の萩焼である。調査区中央部の遺構面で出土した。3は陶器の擂鉢の口縁部である。体部が内湾して立ち上がり、口縁上端は丸くおさまるが、口縁末端を外側に折り曲げ、外縁直下を突帯状に肥厚させている。内面に鉗目的一部分が認められる。18世紀中頃の須佐唐津焼である。4・5は埴輪の小片で、いずれも使用品の小片である。4は口縁部で、上端部は面を呈し、体部に向かってやや直線的に下がる。器壁は0.8cmを測り、厚みがある。口縁上端から内面にかけ、細かい砂粒を多く含んだからみ（金属滓）が厚く付着し、その表面は酸化によって赤茶褐色になっている。外面はからみの付着はないが、器面は二次被熱を受け、非常に細かい気泡の穴を多数有している。また破損面も二次的被熱を受けている可能性がある。5は体部で、外面は一部光沢のある黒赤色のからみが流下して付着する。内面は半分近くが薄く器面剥離しているが、残存部分にからみの付着は認められない。器壁は0.9cmを測り、残存部分復元内径は7cm前後である。



第11図 B地区出土遺物実測図

第2表 B地区出土遺物観察表

No.	種類	層級	出土場所	器種	器形	法量 (g)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な演繹 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	底厚 (復元値)					
1	II	19	SDI	弥生土器	壺	-	(3.5)	6.0	密	やや良	灰褐色 に赤褐色	抱子サエの後、ナデ ハケ耳の後、丁寧なナデ 既成：丁寧なナデ	
2	II	19	遺構面	陶器	碗	-	(3.0)	-	やや粗	良	淡黄色 浅黄色	回転ナデ 回転ナデ	萩燒
3	II	19	SK3	陶器	擂鉢	(20.4)	(3.0)	-	やや粗	良	に赤褐色 灰褐色	回転ナデ 回転ナデ	須佐唐津燒
4	II	19	SP1	土製品	埴輪	-	(1.75)	-	緻密	良	褐黃色 灰白色	ヨコナデ	浮付着（外側のみ）
5	II	19	SK1	土製品	埴輪	(9.2)	(2.1)	-	緻密	良	に赤褐色 灰褐色		浮付着

3 C地区

(1) 調査区の概要

C地区はB地区から北へ約60m離れた低丘陵の裾部に位置する。C地区の調査対象地の南側には北西から南東の方向へ流れる用水路を伴う畦道が存在しており、そのため、調査主体はその箇所よりも北寄りの丘陵側で行った。調査の結果は、土坑、柱穴などの多数の遺構を検出し、当地が過去に集落の一端を形成していたことが察せられる。また遺構は埋土が单一ではなく、遺構の重複もあることから、利用も一時的なものでないと思われる。なお、C地区では多数の遺構を検出したものの、北東側の丘陵側に近いほど分布が希薄で、浅いものが多く占め、また遺物の包含も少なかった。この地区は圃場整備が実施されていないが、土層観察から長い間の耕作により遺構が削られている可能性が高い。

また、用水路以南については、2か所にトレーナーを設定して調査を実施した。結果は地表面下1.4～1.7mで地山面を検出、標高は220m前後である。遺構並びに遺物は皆無であった。

層序は、北側壁面及び南側壁面でみると(図版12)、遺構検出面までは基本的に表土から一貫して厚い耕作土の単層であり、旧水田の痕跡や現代の客土等は認められなかった。現地表面から遺構検出面までの深さは北西端で47cm、南東端で約106cm、南端および西南壁面沿いでは概ね30cm前後を測る。なお、用水路以南に設定した2か所のトレーナーでは、いずれも表土から地山までは自然石や砂礫を含む灰褐色粘質土の単層である。

(2) 遺構

遺構は丘陵裾部の緩傾斜面上、標高221.4m～220.4mの間にあり、大小の自然石礫を多く含む浅黄橙色砂礫混じり粘質土(花崗岩バイラン土)上で、土坑17基、溝1条、柱穴約110を検出したほか、木の根痕の穴とみられるものなどもある。土坑は調査区内南半に多く分布し、平面不整形のものが大半を占め、形や深さは多様である。これらは用途・性格の不明なものが多いが、SK12のように坑内で火を燃やした痕跡を残すものもある。柱穴は径20～30cm前後が多く、中には小杭の穴と思われるような径10cm未満のもののが存在する。なお、多数検出した遺構は配置的に規則性が認められず、柱穴の組合せによる建物施設、構等の構造物の復元はできなかった。また、遺物を伴う遺構は、土坑9基、柱穴8で、その点数は計48点であり、遺構の数に対する遺物包含率は約12%にとどまる。以下、主な遺構について述べる。

SK7(図版16)

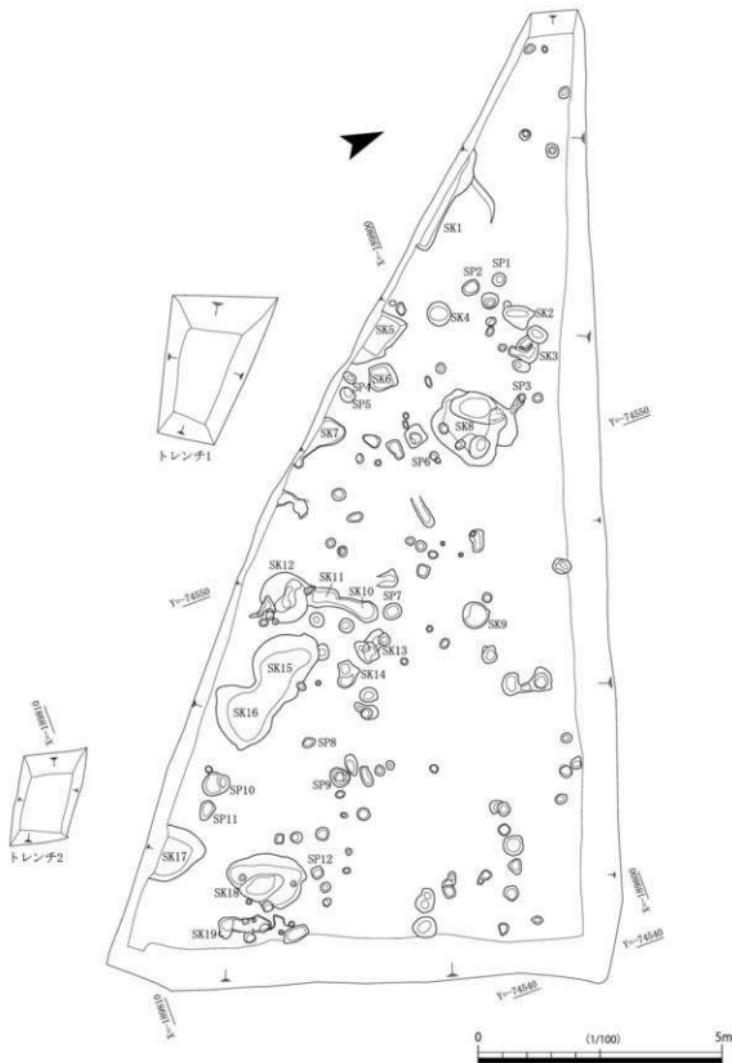
調査区北半部の南壁沿いにあり、遺構の南半は調査区外に及ぶ。平面不整形で、長さ約53cm以上×103cm以上、深さ51cmを測る。埋土は灰褐色粘質土で、瓦質土器、土師器が出土している。

SK8(図版16)

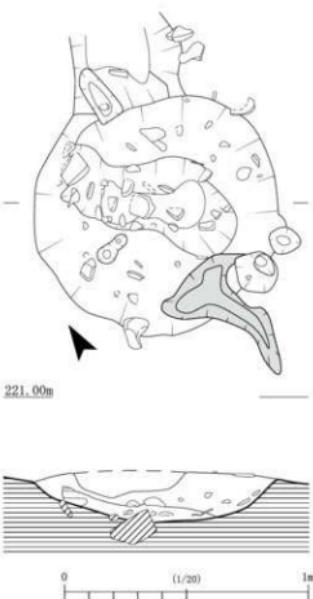
調査区北半に位置する。平面不整円形で155m×135m、中心部の深さ23cmを測る。底面には柱穴や深さ約15cmの大きめの凹みもあり、複雑な起伏を呈する。埋土は主に10cm前後の角礫を含むぶい褐色粘質土である。出土遺物は無い。

SK10(図版16)

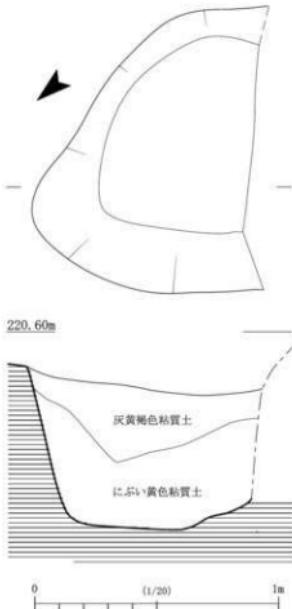
調査区中央部やや南側にある。平面は細長い橢円形を呈し、長さ約1m×幅45cm、深さ34cmで、埋土はぶい赤褐色粘質土。土師器、炭が出土。SK11とは切り合いが認められ、SK10が新しい。



第12図 C地区遺構配置図



第13図 SK 12 実測図



第14図 SK 17 実測図

SK 12 (第13図、図版14・15)

調査区中央部南端に位置する。平面形は $103\text{cm} \times 100\text{cm}$ の円形で、北側の肩部は本遺構埋没後に土坑（SK 11）により、また東南側の肩部は2つの小柱穴および、埋土が淡青白色粘土で、木根痕あるいは小動物による穴かと思われる溝状の凹みによって切られ、一部破損している。SK 12 の深さは検出面から 20cm を測り、底面は緩やかな湾曲状を呈し、平坦ではない。またその内部表面には下層に含まれる小さな自然石が多く表れる。埋土は 2 ~ 3 センチの細かい炭塊を多量に含む灰褐色粘質土の単層で、床面近くでは長さ 23cm、最大径 7cm を測る一端が二股な木炭も包含していた。なお、本土坑は熱を受けているもので、土坑全体に細かい炭の散在が認められ、とくに北半部の肩部周辺から底面にかけての表面は熱により赤褐色に変色する。また土坑内でも下層から表れる自然石の一部が被熱で赤くなっている。ただし、壁面および底面の土は軟質であり、被熱度は非常に低い。出土遺物に土師器小片 1 点がある。

SK 15・16 (図版15・16)

調査区南半にある。いずれも平面不整円形を呈し、SK 16 が SK 15 の東南側の肩部を切る。規模は SK 15 が約 1.5 m × 約 1.1 m、深さ 68cm、SK 16 は約 1.4 m × 1.1 m、深さ 57cm。底面は共に平坦で、埋土も同じ灰褐色粘質土、主に 5 ~ 20cm 大の礫石を多量に含む。遺物は無い。

SK 17 (第14図、図版16)

調査区南端近くに位置する。遺構の南西側は西壁面にかかるために全様は明らかではないが、現状で長さ90cm以上×幅約115cmの不整円形とと思われる。深さは1.3mで、本調査区内の遺構の中では最も深い。内部法面は急角度で下がり、底面は平坦である。埋土は2層で、上層は灰黄褐色粘質土、下層はにぶい黄色粘質土で、拳大前後の自然石礫を多数含む。出土遺物は無い。

SK 18 (第15図、図版17)

調査区東側に位置する。平面は長さ158cm×幅約110cmの不整楕円形で、深さ23cmを測る。東南側肩部には柱穴が重なっており、また南側肩部から底面中央部にかけて長さ93cm、幅54cm、深さ18.5cmの比較的大きな楕円状の凹みを

有し、底面の東西の両サイドには径15cm前後の柱穴も存在する。

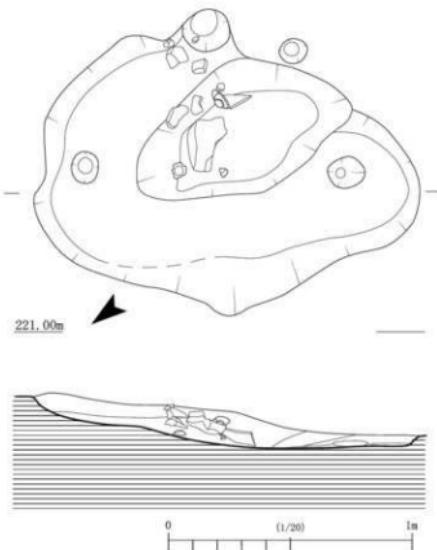
さらに北側底面には木の根痕とみられる80cm×35cm、深さ55cmの穴も存在する。SK 18の埋土は褐色粘質土で、5~30cmの角礫、炭を含む。遺物に磁器、土師器、瓦質土器、炭片がある。なお、本遺構はC地区の遺物を伴う遺構の中では数少ない人為的に土器等を投入、廃棄した可能性を有するものである。

SP 8 (第16図、図版18)

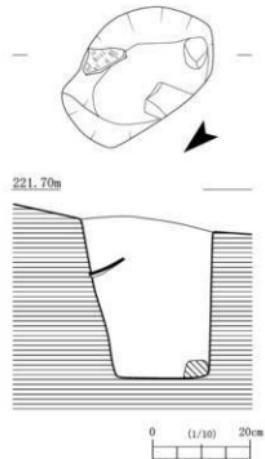
調査区中央のやや南寄りに位置する。平面は34cm×23cmの不整楕円形で、深さ33cmを測る。埋土は小炭を含む褐色粘質土の単層で、底面は平坦、自然石が露出する。遺物には底面から約20cm上で検出した瓦質土器の鍋の胴部片のほか、土師器がある。

SP 9 (図版18)

SP 8の近くに位置する。平面は43cm×37cmの不整円形で、深さ25cmを測り、埋土はにぶい黄褐色粘質土である。内部から柱の根石に用いられたと考えられる自然石2個が重なった状態で検出された。遺物に炭片、土師器がある。



第15図 SK 18 実測図

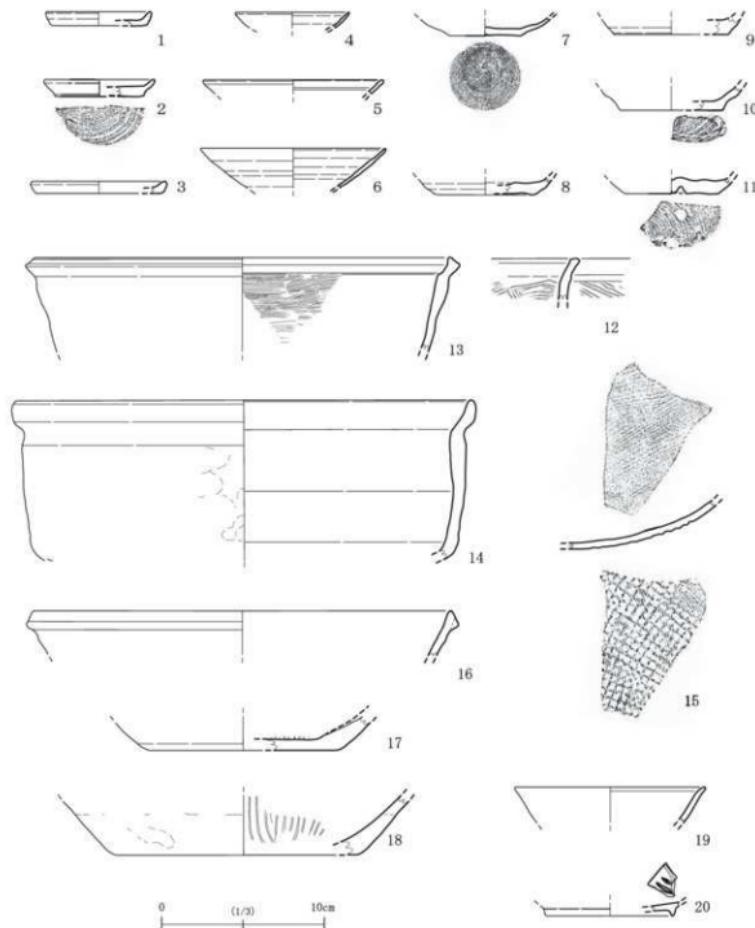


第16図 SP 8 実測図

(3) 遺物 (第17図 図版20)

遺物は、土師器および土師質土器 66 点、瓦質土器 12 点、陶磁器 4 点の合計 82 点である。いずれも破片で、大半は小片である。以下、主な遺物について述べる。なお、概ね比定する時期も記すが、とくに小片は断定できないものもある。

1 ~ 7 は土師器の皿で、1 ~ 3 は器壁が比較的厚く、体部が外上方にのびるが、その立ち上がりは非常に短い。外底面はいずれも回転糸切りである。1 は口縁端部が僅かに面を呈する。13世紀代。2 には糸切り痕が顕著に残る。15世紀代。3 は口縁から底部にかかる小片である。残存部分が僅か



第 17 図 C 地区出土遺物実測図

なため、復元径に若干誤差を含む。13世紀か。4～7は器壁が非常に薄いもので、4～6は体部から口縁部にかけての皿である。4は小皿で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。16世紀。5は口縁で、上端と内面に回転ナデによる稜線がつく。16世紀。6は体部が外方向に直線的にのびる。また内外面共に回転ナデ痕がよく残り、埴汁の痕跡も認める。15世紀。7は体部下位から底部で、外底面には糸切り痕のはか、周縁に細かな板目痕もある。また一部には埴汁が滴りを認める。内底面に黒斑がある。15世紀か。8～13は器壁が厚い土師器である。いずれも杯の底部で、外底面に回転糸切り痕が残る。8は内底面の中央部、見込み部分が凹む。13世紀。9の底部縁辺は角ばる。13世紀。10は体部下位が一旦、湾曲して立ち上がる。14世紀。11は外底面の中心でない部分に径3mm×6mm、深さ5mmの未貫通の穴一つがある。胎土に含まれた石が成形後に抜けたか、あるいは先の尖った棒状のものを突き刺した可能性もあり、要因は不明。13世紀。12は土師質土器の鍋である。口縁は外方向に屈曲してのび、端部は面を呈する。体部の内外面には顯著な粗いハケ目調整がされる。14世紀。13～15は瓦質土器の鍋（足鍋）である。13・14は口縁部から胴部にかけてのもので、13は短く外方にのびる口縁を有し、その端部は外傾斜する面をもつ。また口縁内面は大きく凹む。胴部内面は丁寧な細かなナデ調整を施す。14世紀後半。14は上方に立ち上がる口縁部を有し、端部は丸くおさまる。胴部外面には指頭圧痕による浅い窪みが多く残り、煤の付着が顯著である。15～16世紀前半。15は底部外面に格子目のタタキが残り、胴部下位にはナデ調整も認める。内面は粗いナデ

第3表 C地区出土遺物観察表

No.	博物館	国名	出土場所	容積	器形	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調整(内)(外)	備考
						口径 (復元値)	底面 (復元値)	底径 (復元値)					
1	17	19	SK5	土師器	皿	(6.4)	(0.85)	(5.9)	密	真	にふい・赤褐色 明赤褐色 にふい・青褐色 にふい・黒褐色	回転ナデ 回転ナデ、底部回転糸切り	
2	17	19	延命屋	土師器	皿	(6.8)	11	(5.5)	密	真	にふい・赤褐色 にふい・青褐色 にふい・黒褐色	回転ナデ 回転ナデ、底部回転糸切り	ネズミのかじり痕あり
3	17	19	SK7	土師器	皿	(8.1)	75	(7.0)	密	やや真	淡青褐色 淡青褐色	不明 不明	漆滅のため調整不明解
4	17	19	SK18	土師器	皿	(6.9)	(0.9)	—	密	真	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
5	17	19	SP12	土師器	皿	(11.0)	(0.9)	—	密	真	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
6	17	19	SK18	土師器	皿	(11.4)	(2.5)	—	密	真	灰白色 浅青褐色	回転ナデ 回転ナデ	
7	17	20	SK18	土師器	皿	—	(1.1)	4.4	密	真	灰白色 灰白色	回転ナデアクリ、回転ナデ 回転ナデ、ハケ目、底部回転糸切り	
8	17	20	延命屋	土師器	杯	—	(1.0)	(5.8)	密	真	暗色 暗色	回転ナデ 回転ナデ、底部回転糸切り	
9	17	20	SP7	土師器	杯	—	(1.0)	(7.1)	密	真	暗色 暗色	回転ナデ 回転ナデ、ハケ目、底部回転糸切り	
10	17	20	SK12	土師器	杯	—	(1.5)	(3.3)	密	真	暗色 暗色	回転ナデ 回転ナデ、底部回転糸切り	
11	17	20	延命屋	土師器	杯	—	(1.1)	5.6	密	やや真	淡青褐色 暗褐色	回転ナデアクリ 底部回転糸切り	外底部に黒斑あり
12	17	20	SP2	土師質土器	皿	—	(2.5)	—	やや粗	不良	暗褐色 暗褐色	粗いケ貝目 粗いケ貝目	全体に漆滅
13	17	20	延命屋	瓦質土器	皿	(25.5)	(5.7)	—	密	やや真	暗褐色 暗褐色(断面:灰白色)	回転ナデアクリ 底部回転糸切り	
14	17	20	延命屋	瓦質土器	皿	(28.1)	(9.8)	—	粗	やや真	暗褐色 暗褐色	回転ナデアクリ ヨコナデ、底部圧着、ナデ	漆滅のため調整不明解 保持看
15	17	20	SP8	瓦質土器	皿	—	30	—	微密	真	暗褐色 暗褐色	多方向の粗いケ貝目 格子目タタキ	
16	17	20	SP10	土師質土器	碗	(25.7)	(2.7)	—	やや粗	やや真	灰赤褐色 灰赤褐色	不明 ヨコナデか	漆滅のため調整不明解
17	17	20	SK18	瓦質土器	盤	—	(2.1)	(11.5)	やや粗	やや真	暗褐色 暗褐色	回転ナデ 内面器表側面 外底面に板目圧着	
18	17	20	延命屋	瓦質土器	盤	—	(3.7)	(15.0)	やや粗	真	灰白色 黄褐色	回転ナデ 底部面・灰白色	
19	17	20	SK18	白磁	碗	(11.6)	(2.2)	—	密	真	明オーリーフ灰白色 明オーリーフ灰白色	施釉面 施釉面	
20	17	20	SP3	磁器	皿	—	(0.8)	(7.8)	密	真	明青灰色 明青灰色	青花	

痕が残る。15～16世紀。16は土師質の鉢で、口縁部外面に台形状の貼付突帯がある。13世紀。17・18は瓦質土器の擂鉢底部で、17は全体に器面の剥離・摩滅が著しいが、内底面は回転ナデの可能性がある。また胴部下位にはわずかに鉗目が残る。15世紀。18も器面が摩滅するが、胴部外面に指頭圧痕と粘土の繋ぎ痕が残り、内面は回転ナデの後、鉗目が施されている。また底部には板目圧痕が認められる。14～15世紀。19は白磁で、口縁はわずかに外傾し、端部は面を呈する。口縁内面および端部は施釉後削られる。13世紀。20は青花である。皿の底部で、内底面に花弁の一部とみられる文様を有し、高台の内側に砂目痕がある。16世紀後半。

なお、上記に示した時期の比定などについて、若干補足しておきたい。まず、土師器の皿の中で、器面の色調が白っぽく、器壁が非常に薄いものがある。これらは水挽技法による成形で、いわゆる大内式土師器と称されるものである。比較的の残存度の高い6は器表面のナデケシを施さないことや器壁の厚み等から、北島大輔氏による大内式土師器編年のⅢ式の範疇に属し、推定暦年代は15世紀代の中頃から末に比定される。また底部の7は大内式の古いタイプでみられる見込み部分の窪みを認めないことから、大内Ⅱ式以前には遡らないもので、6と同様に15世紀と考える。また、瓦質土器の鍋（足鍋）については、岩崎仁志氏や北島氏による分類型式にあてはめて考えれば、概ね、13は14世紀後半～末で、14は15世紀～16世紀前半と考えられよう。また、擂鉢の17・18については底部の破片ため、岩崎氏による鉗目単位の研究結果を基にすれば、6本である17が15世紀、5本の18が14世紀～15世紀に比定できよう。因みに、16の青花に関しては、本調査区の南方に位置する主要県道萩秋芳線単独道路の改良工事に伴う発掘調査でも景德鎮や漳州窯などの磁器類が多数出土している。

引用・参考文献

- 岩崎仁志 1990 「防長型擂鉢について」『山口考古』第19号 山口考古学会
岩崎仁志 1999 「足鍋再考」『陶垣』第12号 財團法人山口県教育財團・山口県埋蔵文化財センター
岩崎仁志 2017 「防長型擂鉢の成立と展開—防長型瓦質土器の再検討（1）—」『山口考古』第37号
　　山口考古学会
岩崎仁志 2018 「防長型足鍋の成立と展開—防長型瓦質土器の再検討（2）—」『山口考古』第38号
　　山口考古学会
北島大輔 2010 「大内式の設定—中世山口における遺物編年の細分と再編—」『大内氏館跡VI』
　　山口市教育委員会
北島大輔 2017 「大内式の瓦質土器・備前陶器」『山口考古』第37号 山口考古学会
財團法人山口県教育財團・山口県埋蔵文化財センター 2004 『錢屋遺跡I』
財團法人山口県ひとづくり財團・山口県埋蔵文化財センター 2005 『錢屋遺跡II』
美東町遺跡調査会 2005 『錢屋遺跡』

IV 総 括

遺構

今回の調査ではB地区・C地区から多数の柱穴や土坑などが検出された。調査範囲が限定的であったため、掘立柱建物等の復元は出来なかつたが、両地区では過去に複数の施設が存在していたことが明らかになつた。また遺構が重複している個所があり、遺構の埋土も單一でないことから、一定期間もしくは短期間にしても、度々利用されたことをうかがわせる。遺構に伴う遺物は長州藩銭座設置時期以前のものが多くあり、とくにC地区的土器類は13～16世紀に比定され、中でも15～16世紀のものが多い。今回の調査区の南側、主に銭屋川右岸の既往発掘調査でも同時期の遺物が出土し、銭座創業時以前に集落があったことが想定されているが、今回の調査成果はこれを裏付けるものであり、当時の集落の広がりを知ることができよう。

また、個別遺構に関して、C地区的焼土坑（SK 12）について述べておきたい。銭屋地内では既往調査で銅生産に伴う製鍊炉等が多数検出されており、また銭座の存在からも焼土坑が検出された場合、冶金に関わる炉の可能性を考える必要がある。本土坑は調査の結果、被熱度合がかなり低く、炉壁面が軟質で、粘土貼付けや素灰なども認められなかつた。また本土坑周囲や同地区では鉱石、からみ（金属滓）、蘆の羽口等の冶金関連遺物が皆無であったことからも、本遺構は焙焼炉、製鍊炉、精鍊炉、鍛冶炉といった冶金に関わる炉の蓋然性は低いと考える。今のところ用途等については定かではない。

さらに人為的な遺構ではないが、A地区的トレンチ1では、その中央部から西側にかけて、円礫や大小の河原石を多量に含む砂礫層が認められた。その層は短時間で土石流的に堆積したと推測できるものである。またB地区的自然流路の一部とも考えるNR1の土層堆積状況も同様な様相を示している。幕末の地誌である『防長風土注進案』の中の銭屋村に関する記述に、銭の铸造が行われなくなつた後、洪水があったことが簡略に記されており、トレンチ1中央部での地山の落ち込み状況、またその地山肩部ラインが西方約30m地点での現銭屋川の流路と同じ北西—南東の方向であることも勘案すれば、その砂礫層は過去における銭屋川の氾濫を裏付けるものと思われる。なお、時期は出土遺物から江戸時代以降である。

遺物

遺物では中世から近世にかけての土器類が主に出土したが、とくに注目するものは弥生土器と埴輪がある。弥生土器はB地区から出土した僅か1点であるが、銭屋地内ではこれまで縄文時代の遺物は見つかっていたものの、弥生時代のものとしては初例となる。その時代の遺構は明確ではないが、少なくとも今から約2100年前の人びとがこの地で活動したことを傍証する貴重な資料である。また埴輪がB地区から出土した。埴輪は金属溶解の際に用いるもので、これまで近接地にある銭座跡推定地内やB地区から南西方向へ約110m、銭屋川を挟んで対峙する地点にある市指定文化財「銭屋のハゼノキ」周辺では古くからその散布が知られるほか、今回の調査地の南方を東西に通る主要県道萩秋芳線の既往調査でも多数出土している。今回の調査では出土点数が2点という少なさや、他の冶金関連遺物の出土が無かつたことから、この地点での冶金活動の規模は小規模かつ一時的なものであったと

推察する。ただし、銭座西側外域の銭屋川左岸地域では初めての出土であり、本調査地周辺でも冶金作業が行われていたという成果は大きい。また土器に関しては、とくにC地区において銭屋周辺の在地産ではない大内式土師器と称するものや、輸入陶磁器などのかなり遠方から外来したものもあり、当時の对外交流や物流経済を考える上で好資料となろう。

なお、このたびの調査では遺物の出土量が少なかった。その要因としては、後世、圃場整備および耕作等での地表面まで達する削平行行為が大きいと察するが、加えて、遺構数に対する遺物の包含率も低く、別の要因も考える必要もある。とくに銭座が操業した江戸時代初期の遺構と特定できるものは少なかった。寛永14年4月28日付けの「美祢郡赤村新銭鑄造本屋床普請差図」には、二重の柵に囲まれた銭座の外にあたる東域の山際や、銭座川を隔てた東南域にも関連施設が描かれているが、今回の調査地がある銭座西側外域には何も描かれていない。そのため、銭座設置時期には諸施設そのものが少なかった可能性もある。或いは土器類を持ち込む必要の無い区域であったとも思われる。いずれにしても結論づけは早計であり、今後、十分に検討を要する課題であろう。

おわりに

今回の調査成果と長州藩銭座の関係について述べておきたい。このたびの調査地は銭座の西側外柵ラインに近い外域である。本調査にあたっては、銭座に関係する遺構が検出される可能性も予想されたが、結果的に特定できるものはなかった。長州藩銭座は寛永14(1637)年に寛永通宝の鋳造を開始したが、僅か3年後に幕府は停止命令を出している。しかし、地元の伝承ではその後も25年間にわたり私銭が続けられ、最終的に幕府に露見し、寛文5(1665)年に藩命により当村をことごとく焼き払ったとの伝承がある。これに関して、今回の調査地より南東方向、銭屋川を越えた約200m離れた地点での既往調査ではその痕跡の可能性を示す焼土等を検出しているが、このたびの調査区内では、遺構面が後世にかなり削平されたためか、または寛文5年時点に建物施設が無かったためかは定かでないが、焼土層や炭化物層などは認められなかった。遺物に関しても埴堀が出土したが、土器を伴わなかったために、時期は特定し難い。既に前述したが、銭屋地内ではこれまでの諸調査により、銭座設置以前の16世紀段階で既に銅生産が行われていたことが指摘されており、今回の検出した諸遺構をはじめ、埴堀などもその時期の可能性がある。

最後に、今回の発掘調査で検出された遺構や遺物は、地域の歴史を正しく理解する上で欠かすことのできない資料である。銭屋は「寛永通宝」の鋳造地として、全国的にも注目されている地であり、このたびの調査で銭座西側外域の歴史の一端を解明することができたことは大きな成果である。今後、新たな調査によって、地域の歴史がさらに解明されることを期待したい。

引用・参考文献

- 財團法人山口県教育財團 山口県埋蔵文化財センター 2004『銭屋遺跡I』
財團法人山口県ひとづくり財團 山口県埋蔵文化財センター 2005『銭屋遺跡II』
山口県教育委員会 1987『銭屋—長州藩銭座跡—』
山口県教育委員会 2007『長州藩銭座跡—平成17・18年度重要遺跡確認緊急調査報告書—』
山口県文書館 1962『防長風土注進案 第17巻 美福宰判』
美東町遺跡調査会 2005『銭屋遺跡』
美東町史編さん委員会 2004『美東町史 通史編・資料編』 ほか

図 版





調査区遠景（北から）



調査区近景（東から）

図版2



調査区近景（西から）



調査区全景（真上から）



A地区全景（真上から）



A地区完掘状況（西から）

図版 4



A地区完掘状況（南から）



トレンチ 1 北壁土層断面（東から）



トレンチ 1 北壁土層断面（西から）



トレンチ 1 北壁西端土層断面（南から）



トレンチ 1 北壁東端土層断面（南から）



トレンチ 1 中央部土層断面（南から）



トレンチ 1 中央部地山落ち込み（南から）

図版6



トレンチ2（北西から）



トレンチ2 北側土層断面（西から）



トレンチ2 南側土層断面（南西から）



トレンチ3 北側土層断面（西から）



トレンチ3 南側土層断面（南西から）



B地区全景（真上から）



B地区西侧完掘状況（西から）

図版8



B地区中央部完掘状況（北東から）



B地区完掘状況（東から）

図版 9



西壁土層断面（北東から）



SD 2検出状況（北から）



SD 2検出状況（南東から）



SD 2完掘状況（北西から）



西壁南側土層断面（北東から）



北壁中央部土層断面（南から）



西侧完掘状況（北東から）



西侧完掘状況（北から）

図版 10



西側検出状況（南から）



東側完掘状況（北西から）



SK 3 検出状況（南から）



SK 3 土層断面（北から）



SD 1 土器出土状況（北東から）



SD 1 土器出土状況（南東から）



SK 2 完掘状況（北西から）



SK 1 完掘状況（北から）



NR 1 土層断面（東から）



NR 1 土層断面（北東から）



NR 1 完掘状況（北から）



NR 1 完掘状況（東から）



NR 1 完掘状況（南から）

図版 12



C地区全景（真上から）



C地区近景（南から）



東壁土層断面（西から）



北壁中央部土層断面（南から）



南壁土層断面・SK 1（北から）



C地区中央部完掘状況（南から）



西侧完掘状況（南東から）



西侧完掘状況（北西から）

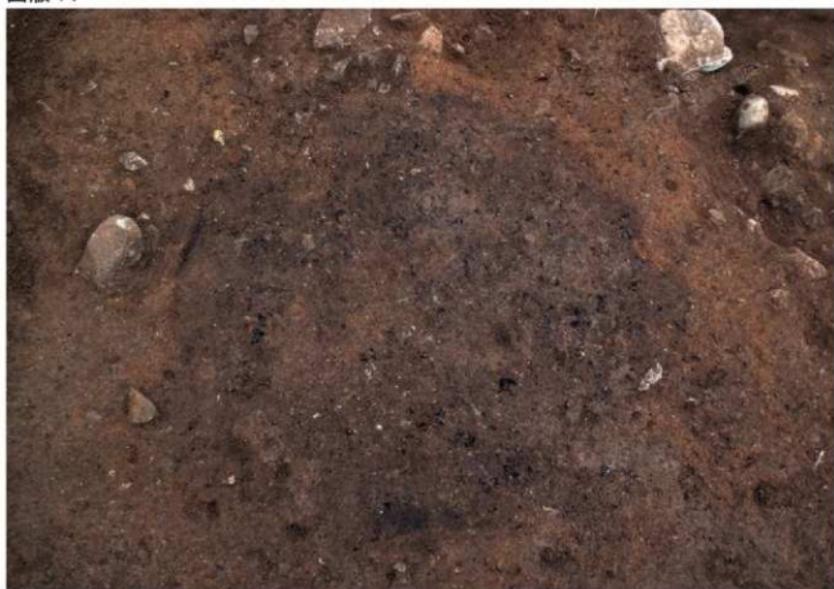


中央部完掘状況（北東から）



中央部完掘状況（西から）

図版 14



SK 12 検出状況（南から）



SK 12 完掘状況（北西から）



SK 12 挖り込み状況（北西から）



SK 12 木炭出土状況（南西から）



SK 12 土層断面（南西から）



SK 12 西側肩部被熱状況（南西から）



SK 15・16 完掘状況（北東から）

図版 16



SK 15・16 土層断面 (北東から)



SK 19 完掘状況 (東から)



SK 17 土層断面 (西から)



SK 8 土層断面 (北西から)



SK 10 土層断面 (北東から)



SK 7 土層断面 (北西から)



SK 9 土層断面 (東から)



SK 9 完掘状況 (南西から)



SK 18 遺物出土状況（南東から）



SK 18 検出状況（南から）



SK 18 遺物出土状況（北東から）



SK 18 遺物出土状況（北西から）



SK 14 検出状況（南から）

図版 18



S P 9 根石検出状況（北東から）



S P 10・11 土層断面（南から）



S P 8 遺物出土状況（西から）



トレンチ 1 完掘状況（南西から）



トレンチ 2 完掘状況（南西から）

A地区



B地区

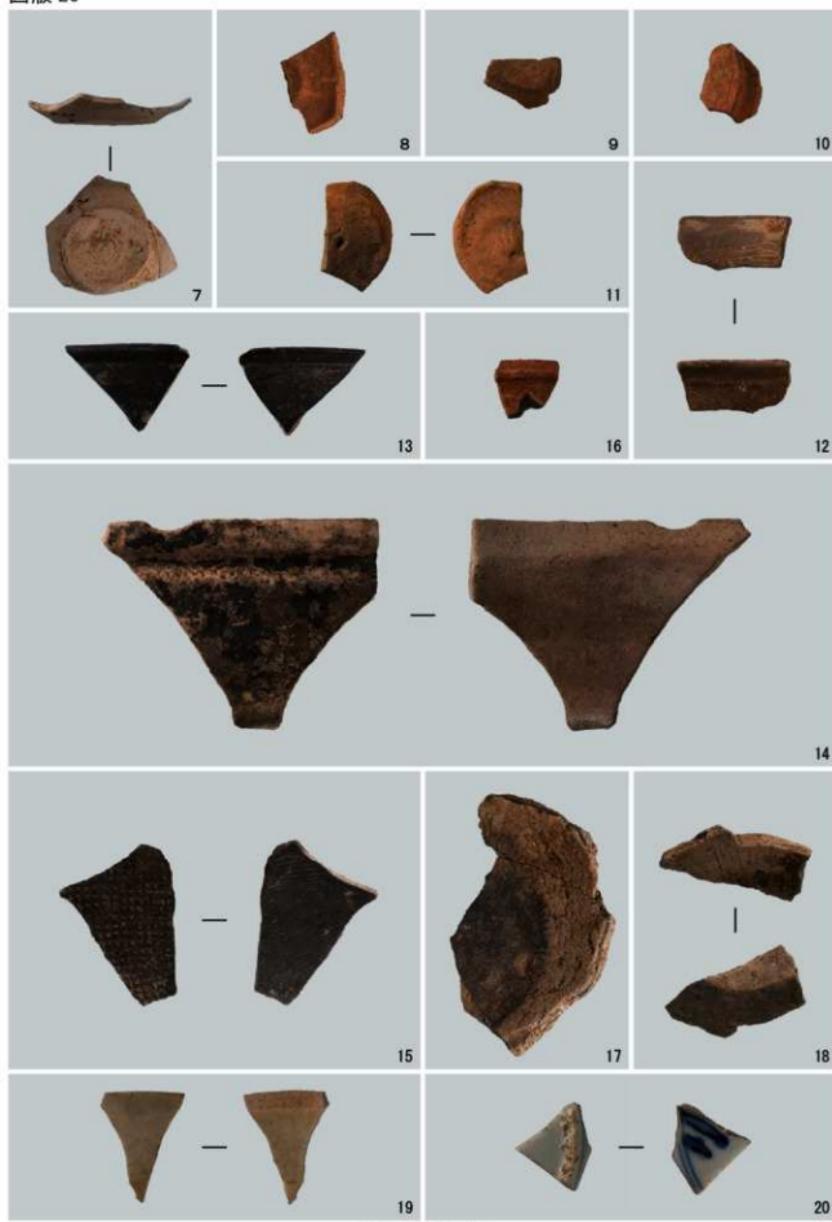


C地区



A地区・B地区出土遺物、C地区出土遺物①

图版 20



C地区出土遗物②

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ぜにやいせき
書名	銭屋遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第103集
編集著者名	石井龍彦 森田孝一 山田圭子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦 2019年3月22日（平成31年3月22日）

所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ○・'・"	東経 ○・'・"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せにやいせき 銭屋遺跡	やまとちけん 山口県 みよし市 みやうらじょう 美東町 えどりょう 鰐堂	35213		34° 17' 8"	131° 21' 24"	20181105 ～ 20190121	713	国道整備

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
銭屋遺跡	集落	室町時代 江戸時代	土坑 24基 溝 4条 柱穴 約360	弥生土器 土師器 瓦質土器 陶磁器 堀	長州藩銭座西側外城に 中世の集落の存在が明 らかになった。また堀 が出土し、冶金作業 も行なっていた可能性 が高い。さらに銭屋地 内で初例となる弥生時 代の遺物が出土した。

要約	<p>銭屋には江戸時代初期に貨幣「寛永通宝」を鋳造した全国的にも著名な遺跡「長州藩銭座跡」がある。今回の調査地はその銭座跡のすぐ西側の外城で、調査の結果、中世を主とする遺構が検出され、銭座設置以前に存在していた集落の一角と推定される。今後さらなる検討は必要であるが、遺構の検出状況および遺物の内容からは集落が短期間の居住を繰り返した可能性があり、また生活用具の関係遺物が極めて少なかったため、特殊な性格を有する集落等であったとの見方もできるかもしれない。</p> <p>遺物には土器類の他、堀があり、当調査地周辺で冶金の作業が行われていた可能性を示唆するもので、銭座との関係で興味深いが、銭座創業時以前の可能性もある。</p> <p>また、銭屋地内で初例となる弥生土器の出土もあり、山間地の狭隘な盆地であるこの地が弥生時代には人の活動の場であったことも明らかになった。</p>
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第103集

錢屋遺跡

2019年3月22日

編集・発行 公益財團法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印 刷 児玉印刷株式会社

〒755-0008 山口県宇部市明神町3丁目4番3号